熊本大学学術リポジトリ

# かなたは西よ ： 文苑

| | |
|---|---|
| 著者 | 夕陽 |
| 雑誌名 | 龍南會雑誌 |
| 巻 | １０６ |
| ページ | ２７-３４ |
| 発行年 | 1904-05-25 |
| URL | http://hdl.handle.net/2298/5692 |

# 文苑

## かなたは西よ

夕陽

### （一）

夕ぐれを秋見送りの星一つ
かなたは西よ人沈みゆく

＊　＊　＊　＊　＊　＊

かつてゆく秋の名殘を惜みてたゞ一人白川の川べに佇みし、ろはをとゞしの秋なりき。落日のかなたにうすく描き出されし雲仙の峯の、夢のごとく暮靄の身にあらはれて、默思の中にかぎりなき思を秘めつゝ、はてはせまりくる夜のとばりにつゝまれし姿、あゝげに永刼に忘られぬ思ひ出の影とはなりぬ。

堪へがたき思の胸を抑へて、爾來瑤落の森にさまよひ落花の風に徘徊し、かくて寂しき野のはてに明し暮しつする中に、タイムは無象の翼をのべてしづかにさはれあはたゞしく無窮のをちにかけりゆきぬ。嬉しきこと、悲しきこと、恐ろしきこと、腹立たしきこと、流轉の人生はあらゆる紛擾の

事蹟をのぜて、變轉又變轉、たとへば果てなき海にさかまく怒濤のかへすがごとく、猛り、狂ひ、動き、ゆらめき、遂にろが歸するところを知らざらんとす。嗚呼われ青春のわれ一度希望の影を追ひてはひたぶるに花咲く峯にあこがれつ、そが脚下に恐ろしき毒蛇の谷の存することをも忘れたり。かくして吾はあせりぬ、憧れぬ。げにや陽炎の野に美はしき希望の影を追ひつゝ、理想と憧憬とに充てる暖かな胸の底にも、さはれ一片云ひがたき悲哀の念の潜まずやは。綠り滴たる若葉の下に瑤落の秋はひろめるを。さなり、活氣と向上と、悲哀と憂鬱とは、共に青春の本色なり。あゝかくしてわれはよく樂しみ、よく悲しみ、よく笑ひ、よく泣きぬ。人よゆるせ、吾れはた遂に愚かなる感情の子に過ぎざりしなり。

（二）

われろの何の故たるを知らず、强ひて知らむともつとめねど、わが愛せる森や川や、さては川を越えて廣がれる野や、海や、あゝそれ等はながくわが心の奥にひそみて、喜びと悲しみとの源泉とはなりぬ。

おゝわが友鎭守の森よ、森をかすめて流るゝ川よ、われはろが奥の極めて深きところにしかくわが心情を引くべき或靈のひろめることを感じぬ。かくて吾は幼なき時より西を慕ひぬ。ろこには森と河と野と山とありければなり。

夕陽名殘の光を投げて青葉の森に輝やく時、われはたばつかなき美の感想にうたれつゝ、森蔭をさ

まよふを常としたりき。もとより無才のわが頭脳には『天も地も野も花も、すべてこれ愛の心よ、人の心の如何ばかり若かく新たに覺ゆべき。あゝ人よ思へ、藝術が自然の跡を慕ふところには、知らずや其處には人生の最も美はしき光明の活現するを』と歌ひし西の國の詩人が情想も浮ばねば、只恍惚として若葉の風に浴してはひとり自ら樂しむなりき。

あゝ思ひ出多き森の姿よ。月なき空に星の飛ぶゆふべ、小鳥の夢もまどかなる太古の森は、一層そが森嚴の姿を增して、ほの暗き木立の奥に神燈明のかすかにまたゝく影などげにや幽寂蕭森、小供心にもいたく崇高の念にうたれしなりき。

おゝわが友鎭守の森よ、なれは今も昔の面影に立てり、されどあゝ人生何ぞ變轉の多きや。今霏々として降る雨の小窓に過ぎこし方を追想すれば昔はたのしかりし哉。

（三）

ある日の夕暮、われ一人森をぬけて川邊に出でぬ。卯の花流しの雨晴れて若葉色濃き晩春のことさらめづらしきゆう暮なりき。涼風靜かに河面を渡りて、媚ぶるが如く袂にかよひ、紅（あけ）にちぎるゝ夕雲の西の方雲仙か嶽の肩をなすりて、半ばりが影を河底に宿し、河を越えて向ひの野べには草刈りの乙女等三々五々、麥田の畦を左手の森の方へと辿る。

美はしき夕ぐれの眺めや。晩鳥かたみのねぐらを求めて彼方の森に翼をはこび、流水ゆるく岸邊の草を洗ひては絶えず潺湲の音を發す。げにや九旬の春光は今ろが名殘の影をのせて流れと共に海の

彼方に消ゆてゆくらむ。折ふし響き來る晩鐘の、しづかに下流の水面を渡りて、暮春の空に波汶を漂はせつゝ一種幽玄の思ひを載せて、有情の天地に消ゆゆきぬ。やがて殘光次第にあせて、森も山も一面にうすき暮靄につゝまれし刹那、唯見れば三日あまりの弦月かすかに峯のあなたにかゝれりき。

かへりみれば青春情を解してより、迷想しきりに身に至り、夢に美はしき世界に遊びしこと幾度なりけむ。あゝ美はしき水の流れよ、野よ、月よ、遙けき峯よ。かくしてわれは永劫の姿を西の彼方に戀ひて慕ひぬ。

（四）

暮れゆく夏の一夜なりき。われはふとなづかしき笛の音を慕ひつゝ、河を渡り野を越ゆてとある海邊の岡に登りぬ。ろは美しき月夜なりき。唯見る前方有明海は烟波縹渺として一面に白き月光を波間にたゝみ、わが慕へる雲仙嶽はうすき狹霧につゝまれてまぼろしの如く星なき空のあなたに立てり。海邊一帶の野は右に左に寂寞の色をひろげ、ところ〴〵森の木立のこんもりとして月下の靄に彳めるゝ、淋しくさはれ美しき眺めなり。

脚下の草に蟲聲唧々のあはれはなくも、葉末をもるゝ晩風の竦然として身にしむはあゝはや秋のものなりけり。森沈の大氣を全身に浴びつゝ、吾は今人氣淋しき丘上に立ちて、遙かに有明海の遠望を恣にしつゝあるなり。

儒を擁せる森の木立は互の枝をさしかはして、いや濃く高く茂り合ひ、そがあはひより折々小さき灯火の洩るゝは里人はまだ眠らぬにや。

心ゆく眺めならずや。縹渺として廣がる烟波の彼方、夢の如き世界はさながら太古の面影を眼前に廣げて、そゞろ五千年來の人類が興亡の跡を偲ばしむるものあるぞや。海は寂寞たり矣、月は無言なり矣、山はた靜けき眠りにつきて、天地の姿は宛然死せるゑれの如きを、嗚呼如何なればそが奥にはつきせぬとはの活動と秘密と潜むらむ。

と見れば月は漠たる淡雲に覆はれて海も山もしばし朦朧たる帷幕の中につゝまれしが、やがてまた波影は黄金色にかがやき出しぬ。月は今雲を出でしなり。

海、山、さらに思ひの翼を遠く遠く西方の世界に運ばしめよ。嗚呼そこには大聖孔子を産みし大なる國土はあらじか。ヨルダンの流れ清きほとり、嗚呼ろこには絶世の偉人基督を産みし美しき國はあらじか。プラトーンを産みし國、アレキサンダーを産みし國、ダンテを産みし國、ルーテルを産みし國、ショーペンハウエルを産みし國、シャーレマンを産みし國、ナポレオンを産みし國、セキスピヤ、バイロン、スペンサーを産みし國、さなり。あゝ數多き偉人は互の踵をふみかはして西の彼方に此世を見舞ひぬ。而してまた忽然として此世を去りぬ。偉なる哉、大なる哉、山よ、海よ、汝等は彼の幾多の偉人が屍を埋めし大墳墓にあらずや。

風なき海に月はいよ〳〵冴くたり。げにも平和穏靜なる海の姿かな。さはれあゝ島美しき以太利の彼方、海よ何なればやさしき詩人シェーレーを底の藻屑とはなしたる。無情か有情かあゝとこしへ

の墳墓、さらば海よ、秘密はとはに語らざれ。吾はただ天地の自然に從つて滿足の生涯を送らんかな。

夜はいたく更けたり。あたり寂として人籟遠く失せぬ。折から遙かの沖の彼方よりかすかに響き來る物の音、吾は耳をすましぬ、そはわが愛する笛の音なりき。吾は再び耳をすましぬ、されどうはふたゝび響かざりき。

次の瞬間に一種云ふべからざる愁念の湧くを覺えて、あはれなる少年の姿は歴然としてわが胸中にうつりぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

月の美しき夜なりき。かつて海のかなたなる雲仙が麓、松青き島原の灣頭にわれ一人月下の逍遙を試みしことあり。頃は霜月初旬なり。氣候温和なる地のさまで冷氣も覺えざれど、海吹く夜風はさすがに身にしむものありき。老松翁鬱たる丘陵の裏手、濱邊づたひに散在せる岩のあたりに出づれば、南方の灣口幾多の小島は綠の松に髻を結び、波靜かなる月下の海は畫にせまほしき趣を呈せり。吾はしばし恍惚として月の海面を眺めやりしが、ふと左手の濱べより松の葉ごしに洩れ來し笛の音、あゝ笛の音、月下の笛の音、そはげに好個の詩にあらずや。

われはしづかに足を運びて笛の音の主を求めぬ。さなり、五分間の後には吾は後ろに崖を負へる松蔭に立ちて、今まさに澄み渡りたる空に向かつて嚠喨たる音調を送りつゝある若き少年が側に立てりき。けだかき心もてるものかなとわれはやをら言葉をかけつ、かくて二人はいつしかうちとけて

互の思を洩らしあひぬ。

運命の浪は無限の力を以てあらゆる世界を洗ひつくし、至る所に之が半面の悲劇を演ずとかや。げにや此の少年もやがてろの數にもれざりし一人なりけり。彼は幼にして早くも世に涙の存することを知りぬ。彼は暖かきたらちねの愛を失ひて、今はなづかしき故郷をさへ遠き海べの彼方に望みて、一人寂しき人生を送りつゝあるなり。おゝ痛ましき哉、月よ、花よ、淋しき森のゆふべに痛手負ひし小鳥の身には、ろも如何なる色に現ずらん。夕靄うすき海のかなた、夢の如き故郷の山を望みて潸然として落涙せし時、彼の顏色は月の光りにすごかりき。嗚呼その夜の風はつめたかりき。

◎　◎　◎　◎　◎　◎　◎　◎

すさまじき世の荒浪の此方の岸より彼方の岸に、よせつ返しつする樣もしばしは忘られたりしを、さても今また月下の海に對し、遠く島原半島を海の彼方に望めば、彼の月、彼の松、彼の岩が根、さては彼少年がやつれし姿、あゝ忘られぬ哉。知らず、彼は今尙此方の山をながめて、たへがたき思ひを愛する笛にもらしつゝありやなしや。

夜は更にふけたり。風は眠れり。月はかたぶきぬ。されど吾は遂にまた海のかなたに笛の音を聲かざりき。

## （五）

現實の世に夢を慕ふは愚か狂か。されど我は夢をしたひぬ。とらへがたきまぼろしの影を求めて、

遠き落日の彼方を慕ひぬ。人よゆるせ、ろこにはわが愛する森あり、河あり、野あり、海あり、山あり、人あり世界あればなり。

愛する森よ、親しき河よ、海よ、山よ、あゝさらばとことはの秘密を秘めて人の世のゆくへ説かざれ。

『完』

夕潮のひゞきみだれて空なりの天の緒琴のしらべくるしき　（歌劍）

牧人の「朝の歌」に夜はあけてカナンの野べは草みどりなり　（芒村）

梅の香にあくがれ出でし公達のたもとにおもし白銀のふえ　（星陵）

天使（みつかい）の男神女神の舞の手にほのかにかほるまら梅の花　（聖花）

竹の葉の散りてみだるゝ垣添の雨の小道をひとり行くかな　（芒村）

夜毎夜毎あめふる使下りきて我にひらけの魂のひめ府（ぐら）　（歌劍）